

# 下関短期大学図書館報

下関短期大学図書館  
2012年 春・夏号

## 保育学科教員の推薦図書を紹介

堀尾昇平

「紙ハネ・紙ゼンマイでびっくりおもちゃ」 千光士 義和 PHP出版社  
動くおもちゃ作成において考えが変わる一冊です。

ゴム動力や、ビー玉使用で作っていた「紙コップの動くおもちゃ」でも、紙で作る動力装置（ハネ・ゼンマイ）で動くのは作ってみると感動的です。ぜひ挑戦してみてください。 ※姉妹本 「かんたん手作り動くダンボールおもちゃ」



木戸純子

「絵本ソングブックシリーズ」(クレヨンハウス)

今や、保育園や幼稚園で大人気の「にじ」や「せかいじゅうの子どもたちが」などの歌を収めた楽譜・絵本シリーズです。洗練されたメロディーと編曲で、心がさわやかになること間違いなしです。

クレヨンハウスは、東京原宿にある夢のようなショップで、子どもの珍しいおもちゃ、絵本、楽譜、オーガニックレストランなどがあり、連日、幼稚園の先生・保育士・ママたちだけでなく、学生・一般の大人の方たちで、にぎわっています。

経営するのは、1970年代のカリスマDJで、現在作家の落合恵子さんです。

1. 「世界中のこどもたちが」全12曲
2. 「ぼくたちのうた」全13曲
3. 「パレード」前12曲
4. 「ハロー!」前14曲
5. 「あしたが好き」全12曲 \*全対応のCDもあります。
6. 「スマイル」全12曲
7. 「ポケットに愛をつめて」全13曲
8. 「地球は歌う」全14曲

☆掲載されている曲の中で、保育学科先輩のおすすめの曲ベストは？

- 第1位「にじ」 第2位「世界中のこどもたちが」  
第3位「ともだちになるために」 第4位「さよなら ぼくたちのようちえん」  
第5位「はじめの一步」

野中宏司

「子どもが育つ！江戸しぐさ」 越川禮子

人は、心に思っていることが、そのまま「しぐさ」（目つき、表情、口のきき方、身のこなし等）の中に出てしまうものです。子どもは敏感で、そうした大人の動きをじっと見ています。子どもは、親のしたとおりのことをなぞるのです。以前、幼稚園の先生から「子どもを見ていると家での親の生活がよくわかります」と言われたことがあります。このことは、とても怖いことですが、一方では、日本の文化が、このようにして親から子へ、つまり新しい世代へと受け継がれていくことを考えれば、とても素晴らしいことなのかもしれません。

かつて江戸という町が、265年の長きにわたって繁栄と平和をもたらし、世界一の大都市となっていた頃、人々は江戸へ江戸へと流れていきました。多くの人びとが異文化の中で、人と人とが助け合い、互いに思いやり、仲良く暮らすための知恵、自己研鑽を積む中で、語り、編み出し、身につけてきたもの、それが「江戸しぐさ」です。

この本は、現代に生きる私たちに多くの示唆を与えてくれています。これまで「礼儀正しい国」といわれてきた日本が、今や大きくゆがんできています。権利を主張するだけで、義務や責任を果たそうとしない日本人が多くなってきているのです。こうした動きは日本だけのことではないのかもしれませんが、これまでの日本の国を考えるといたたまれないことです。

「江戸しぐさ」これは日本の文化です。この大切な文化を守るために、自分の心の中に欠落しているものは何か、しなければならぬことは何か。この一冊の本との出会いを基に自己を見つめなおすきっかけとしてほしいものです。

稲員祥子

「せんたくかあちゃん」「ばばあちゃん」 さとうわきこ



藤原亮治

最近専門書（保育・陸上）ばかり呼んでいて、これといって学生が好むような紹介はできませんが保育学生が専門職につく上で、ぜひ一読しておいて欲しい本を2つ紹介します。

●「これからの保育者に求められること」ひかりのくに出版  
これからの保育を担う皆さんにたいして、今とこれからの保育について丁寧に、比較的分かりやすく書かれてある本です。子どもと関わるということがどれほど大切なことなのか？保育者として自分が有していなければならない資質とは何なのか？この本から感じ取ることができるのではないのでしょうか。そして発育発達について理解するには

●「発達分かれば子どもが見える」株式会社ぎょうせい 監修 田中真介  
0歳から7歳までのこどもの様子をカテゴリーごとに詳細に記してくれています。頭に入れるには少し容量オーバーになるかもしれませんが、手にしてもっているだけでも安心できる。保育者に必要な資質の1番として掲げられている「子ども理解」。これを深めてくれる虎の巻のような一冊です。

読み応えもありますが、ぜひ一読&携帯してみてください。



海野歩未

「子育てハッピーアドバイス」シリーズ 明橋大二

子どもと関わる人も、子どもが好きな人も、そしてこれから親になる人にもおすすめです。



大田啓子

「こどもの詩」 編者 川崎 洋 発行所 文藝春秋

読売新聞の「家庭とくらし欄」で長く連載されていた「こどもの詩」の秀作集です。編者の川崎洋さんは、「こどもの詩」の選と寸評を依頼されたことをきっかけに、子どもたちの素晴らしい感性に触れ、「以前は子どもを知らなかったとつくづく思います。すごい生き物です。彼らの詩はしばしば私の感性の錆をこそぎ落としてくれます。」と言っています。

まだ字を知らない幼児が口にしたことを、親や祖父母が書き留めたものも掲載されています。幼児から中学校三年生までの子どもたちの、大人にはない感じ方や考え方に心を揺さぶられます。子どもたちは大人が失ってしまった能力や感覚を心と体の中にもっています。手持ちの言葉は少ないのに、直球で気持ちが読み手に伝わってくるのです。思わず涙がこぼれる詩、温かい気持ちになる詩、情感あふれる詩にきっと感動すると思います。

純真で無心であるがゆえに、物事をまっすぐに見通し、土、石、光にさえ魂が宿っていると感じ、表現している詩と出会うとき、昨日より今日、今日より明日と、日々成長していく子どもたちの可能性を感じます。一つの詩を紹介します。

さむいよる

藤田 翠（兵庫 六歳）

おかあさんのいないこどもは

どうやって

おふとん あたためるの

大震災の夜、体育館で親子四人が毛布にくるまっていたとき、翠ちゃんがこうつぶやいたそうです。